

平成 23 年度の全国博物館長会議において寄せられた“応援メッセージ”

全国博物館長会議(6月15日開催)のパネルディスカッション「災害と博物館 - 危機管理、復興」の後に
お寄せいただいた 82 件のメッセージから、一部をご紹介させていただきます。
なお、一部文言の修正をさせていただきましたことをご了承ください。

日本博物館協会

博物館は、文化活動の拠点である。未曾有の大災害に人類が人間らしい姿を保つ証として博物館を保持し、支援していく必要がある。また、その認識を広く共有したい。

地域住民の活動の要、よりどころは、先代から受け継がれてきた地域の誇り、歴史、伝統、文化です。個々人がすべてを失った時、やる気が出てくる源は、過去の楽しい思い出、先人の頑張りです。地域の元気の素を博物館は所蔵しています。災害復興への博物館の役割をもっと広く周知することが大事であると考えています。ガンバロー、博物館！

全国の博物館が被災博物館の復興を支援しなければならない。具体的な策・案はないが、支援依頼があればできる限り協力していく所存である。長い復興時間を要するが、協力・支援していきたい。

いつ発生するかわからない自然災害です。今回の大規模地震は、いろいろと問題点が浮かび上がりました。今回のパネルディスカッションから、今後の災害対応について多くのことを考える機会となりました。現地の画像の様子や発言によって、地域文化財の集中調査とデータの集積、地域とのつながり、他地域・外国への正確な情報提供、ボランティア等の協力、国の支援が課題だということがわかりました。“つながって元気になりましょう”“文化財を愛する気持ちで支えあいましょう”

復興はなさねばならぬ、なせばなる。博物館は元気はつらつ！！ 共にガンバリマシヨウ。

阪神大震災では、関西、とりわけ阪神間の各館の被害状況、その後の復旧過程をさまざまな形で見聞き、一部は携わりました。しかし当時は個別館の対応にとどまりました。文化財レスキューがスタートしたのもこの時でしたね。ぜひ地域ぐるみの博物館レスキューと復旧活動を推進して下さい。可能な範囲で協力させていただきます。

この度の東日本大震災で被災された方々、並びに被害を受けた館園の皆様にご心からお見舞い申し上げます。建物等施設の復興もさることながら、文化財の被災につきましても、その復旧に大変な労力と長い年月が必要かと存じます。お互いの館園で共通認識を深め、復興に向けご協力できることを、日博協、文科省、都道府県教育委員会が一体となって考えていければと思います。当館も3月15日に発生した、富士山南麓を震源とする地震により建物にクラックが入ったり、パネル等の落下により一部の展示物に被害を受けたり、附属施設の古民家の瓦が落下したり、洋館の窓ガラスが壊れたり、建物自体にゆがみが発生しました。今度の震災は他人事ではありません。当館も今後発生が予想される東海大地震に向け、今回の大震災の教訓を学んでいきたいと思っております。

「東北のこころ」を伝えるような、全国規模の企画が生まれることを期待します。美術館も博物館も、東北のミュージアムへの支援、全国への巡回展など、出来

る限りの仲間で応援したい。

博物館は、つながりを深め連携をして、地域社会、地域文化の要として、力を尽くしましょう。

博物館の使命が段々と縮小してきている気がします。地域文化の保存と振興、地域の人々の生き様を示す博物館としての旗（フラッグ）をうち立ててほしいと思います。東北の皆さん、がんばって下さい。

未曾有の大震災を経験した日本の博物館、特に関東、東北地域の諸館の皆様にご改めとお見舞いを申し上げます。本日の話をお聞きし、日本の博物館が連携して復興を支援していけば、近い将来、元の姿になり得ると確信しています。ただ、それには地域の皆様だけでなく、国・県など行政の助け（法令成立も含め）が必要です。どうか、次代を担う子供達のためにも一致団結して頑張りましょう。被災館の皆様、頑張ってください。

この震災を経験して、「守る」という事がどれだけ積極的な意志によって可能になるかを思い知らされました。本当の意味で人命・文化財を守るために、内外共に再度危機管理の認識とそれに対応すべき構想を当館でも再検討する所存です。広い視野のもとでの、人と文化財の「共生」をテーマにしようと思っています。

この度の震災の大きさ、被害の甚大さに心が痛みます。心よりお見舞い申し上げます。私共も被災地の小学校・中学校に支援物資をお送りさせていただきました。被害の大きさに比べ、わずかでしたが、少しでも喜んでいただき、ほっとしています。先の長い復興になるとは思いますが、地域の中で大切にされていた文化財・歴史、自然風景は、人々の心の中のものよりどころになると信じています。大変な毎日かと思いますが、未来への指標として、心のよりどころとして、博物館の存在意義は重要と思います。お体に気をつけて、日常の生活を取り戻して下さい。一日も早い復興を心よりお祈りしています。

被災された博物館においては本当に大変なことでした。心よりお見舞い申し上げます。嘗々と集められてきた文化の火を決して消すことなく、長い目で復興されることを期待しております。皆さんのところで何を支援してほしいのか声を大にして発信してください。全国の博物館、関係機関、行政を挙げてバックアップしていきたいと思います。今回の教訓から何をなすべきか共に考えていきましょう。今からスタートです。

博物館は、文化、歴史、科学の英知が具現化した施設なので、震災で得た教訓を集積して、今後、同じ苦悩を受ける人、施設が少しでも減るように勉めて行くことも博物館のミッションと考えます。

博物館は、市民（地域社会）の誇りであり、民族（国）の宝である。地域復興の先頭に立って活動をしていただきたい。市民は必ずやそのことを望んでいると思う。博物館は、人に生きる力を与えることができるはずである。

災害ボランティアとして、石巻市、山田町、大槌町に行ってきました。災害下における美術館の存在意義を考えさせられました。生活が安定に向けて一定の足場ができ、固まったら、必ずや心の糧、ケアが必要になります。その時、私たちが出来ることを今出来る支援も含めて検討しています。復興の杖に、museumは必ずなると確信しています。

被災された博物館の一日も早い復興を祈念いたします。一方、今回無事で済んだ我々は、平常に博物館運営ができるというあたりまえのことに感謝するとともに、社会

にとって必要である館となるべく一層の精進を心に誓います。

失われるモノや文化を記録し、伝えていくのが博物館の役割。大災害で失われたモノや情報を地域につなぎとめるのも博物館の役割。地域が立ち上がる時、その中心に立てるのは博物館。

石碑、昔の人の言い伝え、古文書を解析し、災害を最小限に食い止める方策を、広く地域の人々に対し広報活動を行いたい。

長野県は、地盤が堅く、今回もゆれはありましたが、幸いなことに被害はありませんでした。今回、被災された方のことを思うと心が痛みますが、そんな時にこそ美術のもつ“いやし”の力が何かの役に立てるのではないのでしょうか？心の痛みを少しでも和らげることへの助けができますように…。私どもの美術館は大正時代の建物と蔵を改装した建物です。大正時代の大震災と戦争を乗り越えた、先人の知恵は素晴らしいものと思います。過信は禁物ですが、温故知新で、復興、災害への備えについて、協力ができますと幸いです。

江戸・東京 400 年の歴史は、大火事・大地震、そして戦災により壊滅的な打撃を何度となく受けながらも、その都度、不死鳥のように生き返り、復興を遂げてきた人々の歴史です。そのような都市・東京の歴史・文化の資料の展示を通じて多くの人々を力づけることができたらうれしく思います。

被災した博物館の展示品・収蔵品等が、いつ、市民・県民の目に触れるようになるかを心配しています。生きるための復興が終わり、生活が安定して初めて心が落ち着き、博物館等に足を運ぶことになるのではないのでしょうか。それまでの間、全国の博物館等に 博物館特別展示コーナーのような場所を設置し、支援ができないのでしょうか。あわせて、観光パンフレット、復興状況の写真等を展示しながら、支援ということも可能ではないのでしょうか。また、全ての館に被災地支援コーナーを設置できないのでしょうか。内容は館独自で考えていきたいと思います。

(以上)